

生涯現役を貫いた世界最高齢芸術家・平櫛田中 107 歳

前坂俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

百歳を超えても平櫛田中の情熱、気力はいささかも衰えを見せなかった。毎日朝から、黙々と木彫りのノミをふるい、彫刻し汗を流す。一本数百万円もする直径2mのヒノキ材を一度に三本も買いこんだ。



あと十年は乾燥させないと使えないという代物だ。

百十歳を超えてもなお一心不乱に制作に取り組むつもりなのである。このころ、40歳も若い友人の病氣見舞に「わたしもとうとう満百歳、ま

だまだ仕事が残ってる、朝から工房 晩めしがうまい、ぶどう酒ぼっちり、粥一碗、とろりとまぶたが重くなる」と書いた。

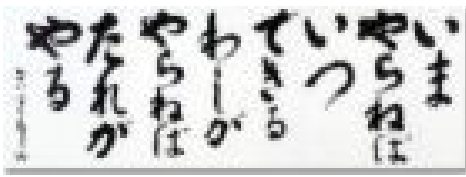
「いまやらねばいつできる、わしがやらねば、だれがやる」。生涯現役、一〇七歳までこの気迫で創作に取り組み続けて、「六〇、七〇鼻たれ小僧、男盛りは百から、百から」を見事に実践してみせた、世界の芸術家に例を見ない長寿だった。



平櫛田中は1872年(明治5)6月、岡山県後月郡(現在の井原市)西江原村(西江原町)、肥料商・田中謙造の長男として生まれた。

実家は没落し、七歳で平櫛家の養子となる。尋常小学校を卒業し15歳で、大阪に丁稚奉公、朝から晩まで身を粉にして働く。

明治26年(1893)、26歳で、好きな彫物への道に進み人形師、中谷省古に入門した。同30年上京し、翌年、高村光雲に師事しながら、独自で木彫り彫刻の道を進んだ。



このとき、下宿近くの谷中の寺で、禅僧、西山禾山和尚の臨濟録の講話を聴き、3年にわたり入門参禅。「禅の心とは、日常生活そのもの。あるがままということじゃ」。

大きな啓示を受けた田中はこの禅師の教えが重要なモチーフとなる。

木彫はそれまで日本伝統の木材を使った仏教彫刻など木彫りが主流だが、明治に入ってきた西洋流の彫刻におされて衰退の一途だった。

明治40年ごろ、平櫛は生涯の師というべき芸術上の指導者・岡倉天心と出会う。



天心も芸術革新運動の1環として日本彫刻会を組織しこれに平櫛も加わり、大正3年には天心の日本美術院研究所で西欧流の塑造研究に本格的に取り組み、伝統的な木彫りを西洋流の彫刻とを融合させていった。

初期の作品は仏教彫刻と呼ばれた「活人箭」(36歳)「法堂二笑」(38歳)「灰袋子」など。

大正九年には鬼が人間を吐き出そうとしている構図の代表作「転生」(48歳)や「烏有(うゆう)先生」(47歳)、天心を描いた「五浦釣人」(58歳)など、写実性と禅による深い精神性が渾然と一体化した作品を次々に作り上げて、彫刻界の押しも押されぬ第一人者となった。



昭和十一年、歌舞伎の名優六代目尾上菊五郎をモデルにした「鏡獅子」(座高2メートル、彩色付)の大作に取り組み、戦争の混乱で何度か中断したものの苦心惨憺の末、22年の歳月をかけ、八十六歳でやっと完成した。この累生の巨作は現在、国立劇場の正面ホールに展示されている。

もともと食えない木彫り彫刻の世界で、若いときから還暦を過ぎても貧乏との戦いだった。天心にある時、思い余って『先生、彫刻は売れません。』

『どうすれば売れますか』と質問すると、天心は「他人をマネせず、売れないものを作れ。そうすると、必ず売れる」という言葉に勇気づけられ、自分の作りたいものを作ると決心、「活人箭」

を作って、傑作として高く売れた。

まさしく、「貧乏極楽、長生きするよ」の人生である。

37年(1962)、九十歳で文化勲章を授与された。伝達式の日、天皇から「一番苦心されたことは」と聞かれた田中は「それは、おまんまを食べることでした」と答えた。貧乏こそが平櫛の創作の源泉だったのがある。

田中のすごいところは、単に長寿だったということだけではなく、晩年まで次々に意欲作を作り続け、百歳過ぎても制作意欲が衰えなかったことだ。

文字通り、60、70歳は鼻たれ小僧で、80、90歳も元気に仕事を続けて、ますます輝いた点にある。

107歳まで持続したとい点では世界の芸術家の中でも最高峰である。たしかに、80、90歳まで活躍した芸術家、100歳を超えた人物も少なくないが、107歳というのは例がない。

日本画家・奥村土牛(101歳)、北村西望(104才)、ピカソ(92歳)、女流日本画家・小倉遊亀(105歳)

長寿の秘訣は「何もありませんなあ。養生法といったものもない。庭は千坪と広いが散歩も仕事が忙しいからしない。不老不死の妙薬もない。ときどき下痢や風邪の薬を飲むくらいで……」と100歳の時のインタビューに答えている。

平櫛は1979年(昭和54年)12月30日、107歳と月で亡くなった。

<禁転載>